合同イン = サービス・トレーニング

高 野 史 子*

東京医科大学図書館

要 約

- (1) はじめに
- (2) 「4大学イン = サービス・トレーニング」の概要
- (3) 「4大学イン = サービス・トレーニング」開催への経過
- (4) 合同イン = サービス・トレーニング
- (5) 今後
- (6) 結び

参考文献

図書館間で相互に協力できる業務は多方面にわたっている。整理部門、閲覧部門での相互協力は、日本医学図書館協会の中でも様々な方法で行われ、これらは今日では日常業務にすっかり組み込まれていて何ら特殊な業務とは感じられていない。これらは、おおむね資料を中心とした相互協力であり、図書館員という人を対象としたものではなかった。本号においても、相互協力を資料中心に論じた文章が集約される予定であるが、本稿では、図書館員のイン = サービス・トレーニングを数館共同で行っている一例として「4大学イン = サービス・トレーニング」について報告し、さらに合同のイン = サービス・トレーニング一般について考察した。

(1) は じ め に

文部省の大学図書館改善協議会は、昭和49年3月28日付で相互協力専門部会と機械化専門部会の各報告を発表しました¹⁾。この相互協力専門部会報告においても資

料中心の図書館間協力の豊富な事例が述べられ、又、日本医学図書館協会でも現実に多岐にわたる活動をしています。しかしながら図書館活動の根幹となる館員の資質——そのイン = サービス・トレーニング——についていくつかの館が共同で行っている事例は多くありませんが^{2), 3)}大阪地区がその事例報告をしています⁴⁾。

この小論では医学図書館員のイン = サービス・トレーニングを共同で行っている一例としての「4大学イン = サービス・トレーニング」の概要を報告し、イン = サービス・トレーニングの相互協力一般について考えてみたいと思います。

(2) 「4大学イン = サービス・トレーニング」の概要

慶応大学、東京医科大学、東京女子医科大学、東京慈恵会医科大学の4図書館が、それぞれ輪番で企画、費用、場所を提供し、図書館員のイン = サービス・トレーニングを行う一連の活動を当事者は便宜上「4大学イン = サービス・トレーニング」と呼び、すでに3回の会合を開きましたが、その名称、活動内容等についての何らの成文規約はありません。次にその実際の会合の記録を簡単にご紹介します⁵⁾。

① 第1回4大学イン = サービス・トレーニング

当 番 慈 恵

期 日 昭和49年4月20日(土) 午後2時~3時40分

主 題 British Library

講 師 松村多美子氏(図書館短期大学助教授)

参加者 6館32名

講演内容:

* Nobuko, TAKANO: Tokyo Medical College Library.

British Library は単一の図書館ではなく、一つの図書館システムであり、ノッティンガム大学副学長の Dainton 博士を委員長とした勧告書^{*1)}が議会に提出され、それに基づいた白書 (1971 年) によって発足したものである。

〔組織〕 以下の国立および国家レベルでサービスを行ってきた 4 つの図書館および書誌センターを基盤とし、サービスの経済性、欠如部分を統合し、修正したもの。

- (1) British Museum Library (BM)
- (2) National Central Library (NCL)
- (3) National Lending Library for Science & Technology (NLL)
- (4) National Reference Library for Science & Technology (NRL)
- (5) British National Bibliography (BNB)

〔構想〕 British Library は各地域の図書館で満足できなかった場合にアクセスするもので、利用者個人が直接利用原点からアクセスするものではない。

- (1) 国内出版物の少なくとも一部は British Library 内に収集し、外国のものについてもできる限り収集する。またこれらに関するレファレンス・サービスを行う。(目標：満足度 80~85%)
- (2) 他の機関を援助する。
- (3) 他の機関が使えるような書誌を作成し、書誌サービスを提供する。
- (4) 国内的、国際的にもイギリスを代表する。

〔機能〕

- (1) 貸出部門 Lending Division
 - { NLL (Boston Spa)
 - { NCL (London より Boston Spa へ移転)
- (2) レファレンス部門 Reference Division
 - { BM Printed Book Department
 - { Manuscript Department
 - { Oriental Department
 - { Science Reference Library (以前の NRL)
- (3) 書誌部門 Bibliography Division
BNB (1974 年 4 月 1 日以降)
- (4) 管理運営部門 Administration

実務上の管理運営の他に、調査、研究、開発の部門があり、そこに 1974 年 4 月より文部・学術省の OSTI (Office of Science and Technical Information) の機能が吸収され、British MARC による書誌フォーマットの共通促進、分類体系の

統一促進、他地区での機械化の開発など、各種のシステムの研究、開発を行っている^{*2)}。

〔全体の感想〕

- (1) 白書に構想が唱われているが、固定されず、流動的に考究し実施していく考え方がある。
- (2) 経済効率 cost effectiveness の考え方が根底にある。

〔質議応答のまとめ〕

- (1) 日本とイギリスの考え方の相異は何か。
—イギリスには、経済効率を考える態度、官庁の行政機構の相異、図書館界の他にあまり依存しない自主性があり、この点から British Library が生まれたと思う。またアメリカは豊富な財源によって機械化を行っている感があるが、イギリスはお金がないから機械化を行う点など非常に対照的に見えた。イギリスでは、現在では小さな図書館でも真剣に機械化を行っている。
- (2) 文部省の情報・図書館課のグループが視察に行った目的とその後の動きはどうか。
—目的は文部省役人の教育であり、その後意識下に考えてはいるが具体的には何もない。また最近の各省庁の情報システムの構想は縦割り行政の先取り合戦のようであり、またあまりにも膨大すぎて具体的実現には疑問点が多い。
- (3) British Library の各部門は、それぞれの窓口機能であるのか。

—現在は、そこまで行っておらず、それぞれの部門に含まれる各図書館が蔵書を持ち各種のサービスを自分の役割範囲で行っている。ただ各サービスが最小必要の規模か、本来のサービスなのかの相異はある。従って BLL は本来は自然科学資料の貸出しであるが、若干のレファレンスサービスもあり、貸出しも自分の収蔵資料に限り、他からのものは不可能であるようだ。

〔*参考文献〕

- *1) Dainton Report
Report of the National Libraries Committee, Presented to Parliament by the Secretary of State for Education and Science by Command of Her Majesty. London, PHMO, 1969. 320 p.
- *2) Department of Education and Science: The Scope for Automatic Data Processing in the British Library, Report of a Study into the

Feasibility of Applying EDP to the operations
and Services of the British Library. London,
HMSO, 1972. 2 vols.

② 第2回4大学イン=サービス・トレーニング

当 番 東 医

期 日 昭和49年6月15日(土)午後2時半~4
時半

主 題 MEDLARS, MEDLINE, MEDLARS II
と日本の医学図書館の進む方向

講 師 津田良成氏(慶応義塾大学教授)

参加者 6館34名

講演内容:

MEDLARS, MEDLINE, MEDLARS II の歴史を概
観し^{**1)} 日本の医学図書館界の現状と医学図書館員のな
すべき方向を展望した。

[1] 1960年代にはMEDLARSの適合率、再現率が問
題になった。米国において今日では、MEDLINE のこ
れらの数値があまり問題とされないのはなぜか。前者に
おいては情報要求者と機械の間に検索者や図書館員とい
う第3者が介在することによって、いわゆるコミュニケ
ーションのズレをひき起していた。MEDLINE におい
ては情報要求者自身が検索することによって検索式の適
時修正が可能であり、適合率が高まり、又たとえ再現率
が低くても満足感が得られる。米国における或るアンケ
ートによれば、MEDLINE 利用者の93%以上がMED
LINE は伝統的な索引誌より有効、75%以上が有料であ
っても利用すると回答している^{**2)}。

[2] 日本ではMEDLARS利用の大部分が医薬品メー
カーであり、海外においては、70%以上が大学等関係者
である。

[3] MEDLINE が日本に導入されるとしてもその検
索には①英会話体による、②日本の雑誌は少数しか入力
されていない、等の欠点がある。しかしこれらの短所を
認めてもなおMEDLINE が導入されていない日本の医
学界の損失を考えずにはいられない。

[4] 具体的に日本の医学図書館員は何をなし得るか。

- (1) 図書館員自身がMEDLINEについてよく知
る。
- (2) 日本医学図書館協会が利用者にMEDLINE
を知らせる。
- (3) 図書館員の「動けるグループ」「身近に要求
のあるグループ」から活動する。
。 JICST のMEDLARSをもっとよく利用す

る。

- 。 医学サイドのセンターをつくる。

[自由討議]

(1) 日本医学図書館協会のMEDLARS対策は何
か。

—MEDLARS拠点校の設置。

—JICST, 協会主催のMEDLARS 検索研修会に
よるPR。

—「医学図書館」によるMEDLARSのPR。

(2) 日本医学図書館協会はMEDLARSについて
の諸活動を、有志の時間外活動としておかずに、
加盟館の必須の図書館活動の一つとして組み込む
必要があろう。

[**参考文献]

^{**1)} Sodergren, L.: MEDLARS II; a review.
Bull. Med. Libr. Assoc. 61(4): 400~407,
1973.

^{**2)} Moll, W.: MEDLINE evaluation study. Bull.
Med. Libr. Assoc. 62(1): 1~5, 1974.

③ 第3回4大学イン=サービス・トレーニング

当 番 慶 応

期 日 昭和49年9月25日(水)午後3時~4時
半

主 題 図書館間相互協力活動~今後の課題~

講 師 沙藤隆茂氏(文部省情報図書館課専門員)

参加者 8館31名

講演内容:

[1] 文部省主催で大学図書館改善協議会が昭和49年
3月末に、相互協力専門部会報告、機械化専門部会報告
を発表した^{***1)}。

[2] 一つの大学の中において、図書館長の職権が、全
学の全図書に及んでいないのが現状である。学長、図書
館長の職権を全図書に対して及ぼすような構成の強化、
再検討が必要である。現在文部省では「学術雑誌総合目
録」の編集に当たっているが、一大学内の協力関係調整が
急務である。

[3] 相互協力というものにはボランティアが必要であ
る反面「善意の塊」でありすぎた図書館活動によって自
らを縛ったとも言える。大規模図書館においては明らかに
互恵互助の精神が崩れているし、サービスの拡大が今
日になってサービスのネックにもなっている。自然発生
的なネットワークではなく、意志的、計画的なネットワ
ークの必要性が出てくる。

〔4〕円滑な相互協力には、ネットワーク、拠点、行政上の援助が必要である。

〔自由討議〕

(1) 国立大学図書館職員の定員削減について。

—今行政上の問題は、全国の国立大学図書館員のうちの臨時職員の処遇である。文部省管轄公務員約11万人のうち図書館正職員約2,500人、臨時職員は約800人である。公務員削減の政策の中にあつて図書館職員のみを増員するのはむずかしい。具体的数的資料が必要である。又、図書館をささえるまわりの人々(館長、学長、教職員、学生等の利用者)の具体的な要望が行政を動かす力となる。

(2) 複写代金の前納、後納について

—国立大学・私立大学間の場合は認められない。

〔***参考文献〕

***1) 文部省大学学術局情報図書館課：昭和48年度大学図書館改善協議会報告 相互協力専門部会 機械化専門部会 1974, 176 p.

(3) 「4大学インサービス・トレーニング」開催への経過

「4大学インサービス・トレーニング」の開催をスームズにした母体がありましたので、この経過をご報告いたします。

図書館員のインサービス・トレーニングは利用者のための図書館活動の向上の基本であり、その実施は管理職の主要な業務の一つです⁹⁾。各館では館員の教育にそれぞれの条件に沿って独自の活動がされています^{7) 8)}。

図書館員が専門職であるために望まれる条件としては次の項目があげられるでしょう⁹⁾。

① 語学の知識

a 外国語

b. 主題の専門用語：これは主題の知識そのものではなく、単に用語を指す。

② 記録情報に関する知識

a. 利用者の要求を知る——user study

b. 資料(記録情報のメディア)に関する知識

　　{ つくられ方

　　{ 分布

　　{ 出版

c. 資料の組織化の方法に関する知識

{ 分類
{ 目録

一つの図書館の限界をもあわせて考えること。

d. 情報ファイルをひき出す方法に関する知識

e. 経営、管理、理論、ネットワーク、国際的な政策(たとえば UNISIST)などの知識

③ 日進月歩の新しい知識を常に持ち、明日のために伸びられる要素を持つこと。

これらの要件を、学校教育を基礎にしたインサービス・トレーニングで獲得していくには多様な方法があります。どのような学習でも常に結局は個人の自発的な意欲がなければ身につくものではありません¹¹⁾。自分の専門の、すくなくとも仕事そのものである図書館・情報学雑誌に目を通すことでさえ意欲がなければできないことでありましょう。しかしながら、インサービス・トレーニングは常に個人の研修だけでは十分ではなく、業務の一環としての公認、すぐれたリーダー、継続性、そして個人の意欲が必要となります。有志の業務時間外の研修は、崩壊しやすく不安定であります。

獲得すべき内容としては上記①～②がありますが、個人なり、少人数により日常業務そのものの研究にかたよると、それが身近なものであるためにかえって図書館員として必要な今日の大きな流れ、トピックスを見失いがちなのは否定できません。図書館、情報を扱う世界の流れをキャッチし、それらをどのように理解し、個々の活動の知的背景とするかを一人一人が考えることは、日常業務を豊かなものにします。反対に自分の分担範囲にのみ埋没してしまうと、自分と図書館という単位が太平洋の孤島のように所属機関、社会から遊離してしまいます。柔軟な思考と行動は幅広い見聞から始まると言えるでしょう。諸種の制約の中にあつて、それでは現場の図書館員はどのようにしてこの広い世界へと放たれることができるでしょうか。

インサービス・トレーニングの効果には、その内容によって、館内で行った方がよいもの、個人で行うもの、又館外で行った方がよいもの等が考えられます¹²⁾。館外での教育には研究集会、講演会、セミナー等があり、日本医学図書館協会をはじめ種々の団体は、その活動の一環として各種のプログラムを提供しています¹³⁾。又、国際医学情報センターのように現職者教育を業務の一つとしている機関もあります¹⁴⁾。これらには、地理的、時間的、参加費用等の制約があり、内容的に重複もあり、理念としての「研修のシステム化」が期待される

所以であります^{15), 16)}。日進月歩の知識や図書館、情報の世界の動向などについては常に外部に敏感でなければなりません。各館内に必ずしも図書館、情報界のすべての動向に鋭い人材があるわけではないので、それぞれの問題について一番よく知っている図書館内外の方に解説、展望していただくのは有効な方法となります。

このような潜在的な経過の後、東京医科大学図書館では館内研修の他に、館外講師による話題提供と講義をお願いすることになり、2回にわたって会合を開きました。この2回の会合の際、都内の多少の加盟館にも参加の案内状を差しあげ、第1回には2つの他館から3名、第2回には他の5館から7名の参加を得ました。この2回の会合において、このような有意義な会合を他館からの聴講を得て継続する予定なら、幾つかの館がその開催の労を取る当番館となつてはどうか、という合意ができました。つまり館外研修の小規模な相互協力グループの発生と言えましょう。具体的に合同で物事を行うにはそれなりの苦勞がありますが、とりあえず地理的にも近く各種の活動においてもすでに実績を持ち「集まりやすい」東医、慶応、慈恵、東女医がその核となるのが実際でありました。こうして「4大学」となり、その第1回の会合が昭和49年4月20日に開かれ、その後の経過は前章において述べたとうりとなっています。現在のところ1年間に4回、各2時間位とし、4大学以外の参加も自由であると了承されています。次に「4大学」の母体となった東京医科大学図書館のインニサービス・トレーニングの一環としての講義概要を付記します。

① 第1回東京医科大学図書館インニサービス・トレーニング

期 日 昭和49年1月25日(金)午後2時～4時

主 題 医学情報と医療情報

講 師 津田良成氏(慶応義塾大学教授)

参加者 3館13名

講演内容:

最近「医療情報」ということが図書館の外でよく言われているが、これは医学情報とはどう違うのか。資料の提供から情報の提供へという傾向の中から、ドキュメントリスト、システム・アナリスト等が生まれてきている。今図書館は最小限どんなサービスをしなければならないか、又最大限どんなサービスをできるのかを再考する必要がある。

[参考文献]

- 1) de Solla Price, D. J.: リトル・サイエンス・ビ

医学図書館 20巻4号('73)

ッグサイエンス 島尾永康訳 創元社 1970, 224 p.

- 2) OECD: Information in 1985.

- 3) 原田幸彦他: メディカル・データバンク 総合臨床 22(1): 175~185, 1973, 1.

② 第2回東京医科大学図書館インニサービス・トレーニング

期 日 昭和49年3月18日(月)午後2時～4時

主 題 新入職員におけるインニサービス・トレーニングはいかにあるべきか

講 師 沢本孝久(慶応義塾大学教授)

参加者 6館17名

講演内容:

日本では、図書館員は専門職でもなく、非専門職でもない。図書館員は何を知らなければならないか。利用者が自分自身ですべて探して処理できる方法の実験があるが、効果があがっていないという。そこに図書館員——人間が介在する意味があるらしい。training, education, in-service training, on-the-job training の語義。インニサービス・トレーニングの内容 (orientation, on-the-job training, 非図書館学講習, 図書館学講習)

(4) 合同インニサービス・トレーニング

以上が「4大学インニサービス・トレーニング」の事例報告ですが、次にインニサービス・トレーニングを当事館のみで行う場合と数館合同で行う場合の長所、短所を考えてみたいと思います¹⁷⁾。

① 一館内で行う場合

どのようなインニサービス・トレーニングでもそれが業務時間内に利用者サービスをしつつ行う限り、すべての図書館員が持場を離れることはできません。誰かがカウンター要員として残るとか、又、時差出勤のある職場では出席したくてもできないことがある、というのが現情であろうと思います。又、各館にはそれぞれ個別の事情があり、その条件によって研修時期、テーマ、方法等の計画をたてねばなりません。つまり館内でその所属館員のみを対象として研修を行う場合には①参加人数をかなり多くできる……集まりやすい、②それぞれの条件に可能なかぎり都合のよい企画をたてることのできる……融通性、を長所として挙げられるでしょう。

② 数館合同で行う場合

この場合は一館内で行う場合と反対のことが言えると思います。他所へ出かけて行くための時間、仕事の一時

的混乱, 参加者の順番, 自館内での具体的な問題とは直接に関係のないテーマなどが問題となります。しかしこれらの問題点を認めた上でもなお長所が挙げられます。

- (1) 企画者が多くなるので, その選ぶテーマも偏りを少なくできる。
- (2) 講師等の費用負担が減少する。
- (3) 講演, 討議の内容が幅広く活発になることが期待できる。
- (4) 他館の館員との交流により, 大きな研修会等ではあらわれにくい各館の個々の事情, 共通の問題点があらわれ, そこからさらに他の業務の研究協力が生まれることがある。
- (5) 館員同士のインフォーマルな交流によって日常業務の様々な関係が円滑になる。
- (6) 知的刺激を受け, 外への意識がひらけ, 独善に陥る危険を少なくする。

館内で行う時には融通性がかえってマイナスになり研修がルーズになる可能性があり, 又, メンバーの固定によりマンネリに陥りやすく, この点はインサービス・トレーニングにすぐれたリーダーを必要とする所以であります。

合同で行う短所としての「集まりにくさ」を乗り越えるには, 協力関係のとりやすい図書館を選ぶ必要があります。

- (1) 地理的に近いこと: この点東京地区は恵まれていると思います。
- (2) 設立団体が同じであること: 国公立, 大学, 企業, 病院, 研究所などがあります。
- (3) 規模: いわゆる格差の問題です。

以上の要素はインサービス・トレーニングに限らずすべての業務の協力関係を十分に効果的, 継続的なものとする上に必要なことでしょう。規模については, 日本医学図書館協会が入会加盟基準で量的な等質を課す¹⁸⁾がゆえに, 今日, 閉鎖的団体であるとの言が聞かれますが十分な協力活動を目ざす時程“give and take”つまり逆に“与えない者は与えられない”という落とし穴に転落する危険性が大きいと言えます。広い活動の場を求めた館外協力がそれよりさらに広い世界を閉ざす壁にもなり得ることは, 考えてみなければならぬ本質論ではないでしょうか。

(5) 今 後

過去3回の「4大学インサービス・トレーニング」

表1 出席者数と館数

会 合 名	出 席 者 数			館 数
	東 医	他 館	計	
東医①	10	3	13	3
東医②	10	7	17	6
4大学①			32	6
4大学②			34	6
4大学③			31	8

及び2回の「東京医科大学図書館インサービス・トレーニング」の参加者数は表1のようになります。これらは先にも述べましたように時の話題についての講演会でしたが, 講演会形式の会合は, 講師が一方的に話し, 参考文献を指示し, 印刷物を渡すもので, 受講者が考える暇を持てずに話されていくと, 問題意識と無関係に進められやすく, 知的刺激を受ける一方, 仕事にもどってからその刺激を伸ばす手段が無い場合はかえってガッカリさせる危険があります¹⁹⁾。そこで, 会合の講演の他に十分な自由討論の時間を設けないと結局は聞き流しに終りがちです。実際の過去5回の例では, それぞれ参考文献の指示がありましたが, 参加者はこれらに目を通さねばならないことは「教育」上当然のことと言えます。参加人数は30人前後の実績ですが, もう少し多くなると一方的な講演会に終るおそれは増すと思います。じっくりと勉強する意味では一館の館員のみで行う方が実りはあるでしょう。内容によって多くの方法を併用した方がよいのですが図書館の協力活動として教育を行う時は, あまり館数, 人数を多くしないで私塾形式で行う方が長続きするように思います。現在, 4大学合同で3回の会合を開いた時点では, よその図書館が開く会にお客として出席するのではなく, 自分もその一員である会合に出るのだという意識を持たないと情性に流されてしまうのではないかという印象を覚えます。

(6) 結 び

館内でのインサービス・トレーニング及び他館との合同のインサービス・トレーニングの長所, 短所について実例を通して考察しました。この「4大学インサービス・トレーニング」は, まだ開催回数も多くはないのでこれからも会合の形は流動的であろうと思いますが, 他館と合同で行うにあたっては, その規模をあまり大きく広げないこと, 継続的に行うこと, 自分も合同の

一員であることの認識が重要であり、加えて自館内、個人の研修もひきつづき併行することが必要であると思います。

——謝辞——

この小論執筆にあたって、東京医科大学図書館主任司書のご指導、同僚の皆さんのご協力をいただきました。又、次の諸先輩の文献を参照させていただきました。明記してお礼を申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 文部省大学学術局情報図書館課：昭和48年度大学図書館改善協議会報告—相互協力専門部会 機械化専門部会— 1974, 176 p.
- 2) 沖田 学：医学図書館員の研修計画について 医学図書館 15(3)：189～196, 1968.
- 3) 日本医学図書館協会：第37回日本医学図書館協会総会 パネルディスカッション—医学教育・研究と医学図書館— 資料集第2分冊 p. 22～27, 1966.
- 4) 浅野次郎：地区活動—大阪地区医学図書館協議会— 医学図書館 13：124, 1966.
- 5) 「4大学イン=サービス・トレーニング議事録」第1回, 第2回 館内資料 1974.
* 第3回議事録は未入手
- 6) 全国国立大学図書館長会議：大学図書館の業務分析 日本図書館協会 1968, p. 40.
- 7) 医学図書館 19：339～358, 1972.
- 8) 日本医学図書館協会：第44次日本医学図書館協会総会承合事項 p. 6～13, 1973.
- 9) 沢本孝久：新入職員におけるイン=サービス・トレーニングはいかにあるべきか 第2回東京医科大学図書館イン=サービスト・トレーニングにおける講義ノート, 1974.3.18. (非印刷物)
- 10) 緑田智晴：内部研修 図書館界 21：237～243, 1973.
- 11) 松村多美子：図書館研修の意義—図書館員の継続教育について— 学術月報 25(11)：698, 1973.
- 12) 田沢恭二：図書館員の内部研修について 図書館界 21(6)：231～236, 1973.
- 13) 医学図書館 19：315～338, 1972.
- 14) IMIC news no. 4：5, 1974.
- 15) 前掲書 1) p. 56.
- 16) 裏田武夫：医学図書館員教育—現場をもつ科学の立場から— 医学図書館 13：92, 1969.
- 17) 森 耕一：図書館員の研修 図書館界 21：228, 1973.
- 18) 日本医学図書館協会：入会加盟に関する組則～加盟資格基準
- 19) 前掲書 9)

海外ニュース

東 西 南 北

日本の医学図書館の印象

オクラホマ大学 Health Sciences Center Library の Ms. Ruth W. Wender は日本の医学図書館見学記を Special Libraries 誌に発表している。

筆者は、慶応大学、東京大学、慈恵医科大学、昭和大学、京都大学の各医学図書館及び財団法人国際医学情報センター、特殊法人日本科学技術情報センターの7機関を訪問し、それぞれの活動の概要と統計を挙げたのち、日米の医学図書館の簡単な比較の印象を述べている。

- ①雑誌「医学図書館」の論文とアメリカの図書館雑誌のそれと主題が同様である。
- ②論文の複写が多いこと。
- ③相互貸借が活発なこと。ただし、アメリカとちがって

地域図書館制が確立していないこと、一部の館において明らかに貸借のバランスが崩れていること。

- ④アメリカでは一般的である件名目録をあまり作っていないこと。そのかわり書架カードと呼ぶ分類目録が使われていること。
- ⑤アメリカではさかんな視聴覚資料の収集利用が、日本ではほとんどないこと。
- ⑥索引誌、英語の雑誌をよく収集していること。
- ⑦提供されるレファレンス・サービスに大きな違いがあること。
- ⑧訪問した2つの情報センターは、コンピュータ指向であること。

(Spec. Libr., 65(7)：281～287, July 1974.)